

## 漢華文瓦璫考

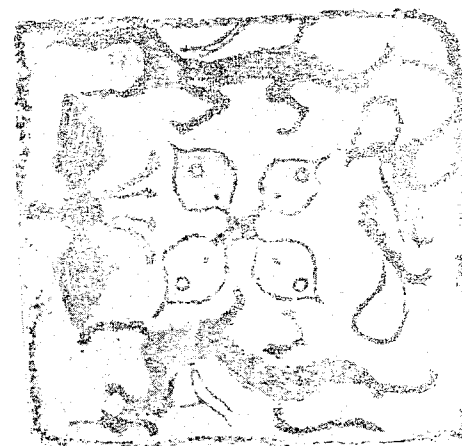
駒井和愛

漢代の瓦璫に吉祥の文字を刻したものや、私がかつて雲を象徴したものであらうと説いた<sup>(1)</sup>旋回する  
藏手様の曲線文を附けたもの等が多いことは、何人も心付くところであるが、此のほかは普通「四葉  
文」瓦璫と呼ばれてゐるものも少くない。高橋健自氏舊藏の瓦璫の如く前記の藏手の文様の中央に  
「四葉文」を置いてあるものがあり、又樂浪郡時代の遺址である平壤對岸の土城から發見されるも  
ののやうに、大きな「四葉文」を置き、其の間に菱形文を配してある挿圖一の如きものもある。  
しかして所謂「四葉文」は伊東博士が擧げられた例のやうに漢代の方形敷堞にも見られ<sup>(2)</sup>、  
漢鏡の背面にも、銅盤や漆器の裝飾にも施こされてゐて、漢代に流行した意匠であつたことが知られ  
るが、また戰國時代の遺品にも表はれてゐるので、此の種の文様が元來如何なるものを現はしたもの  
かを明らかにするためには、先づ戰國時代の鏡鑑其他のものに就いて觀察しなくてはならない。戰國  
式の銅鏡のうちには、細線の地文の中央に「四葉文」形の紐を置き、其の周圍にまた「四葉文」を装



一 圖 挿  
 (土田城土浪樂) 漢五代漢

究室蒐集品中の綏遠地方發見にかかるものの如く「四葉文」の周圍に山字形を大きく表出したもの等がある。序を以つて此種山字形文に就いて記るすと、此の文様は前掲の菱形文様から演化したものであらうと推測される。



二 圖 挿  
 漢 代 方 磚

ひ、更に其の間に菱形文様を配置したものや(挿圖三)、或は中央に所謂「四葉文」の座を置き、其の周りに同じやうなものを四個表現して、其の間に菱形文の便化されたものを以つて飾つてゐるものや(挿圖四、或は「四葉文」に交つて水禽の類を刻したものや、其の他か東京帝國大學考古學研

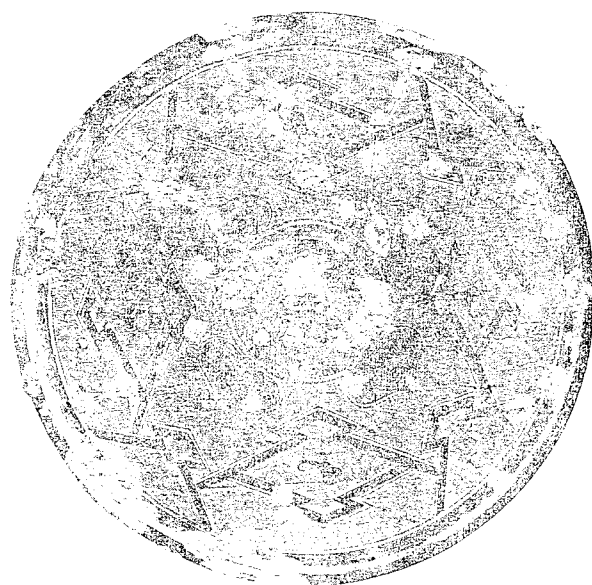
以上のやうに漢代の瓦瑤に見ゆる「四葉文」は其れ以前から流行してゐた意匠であつて、必ずしも漢代に創まつたものではない。しかも四個の葉狀に表現することは、

挿圖四

戰國時代銅鏡 (直徑二十八センチ) 滋賀縣出土



漢華文瓦片考 (駒井和愛)

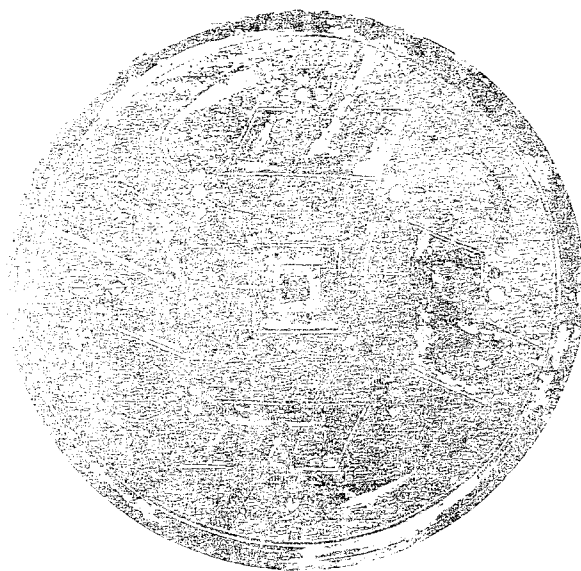


三 圖 挿  
 (中江) 戰國時代銅鏡  
 滋賀縣出土

何等根本的な意義があるものでないことは、細川侯爵家所藏の漢金書飾盤の中央に見ゆるが如く八葉になつてゐるものがあり、又、戰國式銅鏡のうちにも三葉五葉のものがあるから推察することからも窺はれるであらう。更に注意を要

(170)

すべきことは戰國式鏡の一つに(挿圖五)方鈕の周圍に入個の葉狀を裝飾し、其の周りに山字文と八個の「四葉文」とを表はしてあるものがあり、しかも其のうちの四個の「四葉文」形には長い莖が附



五 圖 挿  
戰國時代銅鏡 (東京)  
藏者 東京博物館

いてゐるものが存すると云ふ事實であつて、所謂「四葉文」と呼ばれてゐるものが、四瓣の華文と何等かの關係があるものでは無からうかと云ふことが看取されるのである。前にも記したやうに「四葉文」が水禽や菱形文と共に現はされてゐるものがあり、此の長い莖をもつ四瓣の華文は水面に咲き出でる花の或るものを彫したものであらうと思はれるので、或は菱花の四瓣を象つたものかも知れないと想像したのであるが、四つの瓣を畫くことに就いては、たいした意味があるわけでも無さうなので、俄かに菱花を表はしたものと斷定してしまふことも出来な

いであらう。又支那人は古來菱に就いては其の花よりも寧ろ實や葉を愛玩してゐたやうである。其れ

(171)

は兎に角、漢代の支那人が此のやうな「四葉文」を以つて、華文と認めてゐたことに關しては、文獻の上からも證することが出来るのであつて、彼の粘蟬縣址附近古墳發見にかかる樂浪郡時代の車蓋の銅蓋の如く、其の先端に「四葉文」の飾りが附いてゐるものがあるが(挿圖六)、之れが張衡の東京賦に見ゆる葩蚤、後漢書輿服志に記るされてゐる華蚤に比定さるべきものであることは、我々が既に説



六 圖 挿  
漢代華蚤 (東京)  
藏者 東京博物館

いたところである。かくの如く考へて、所謂「四葉文」が實は華文であると云ふことは斷言して憚らないと思ふ。

さて然らば普通に「四葉文」と呼びなされてゐるところの華文は、そも／＼如何なる花を表現したものであらうか。此れに就いて述べるに際し、先づ思ひ出されるのは樂浪吾野里第十九號墳出土の木棺の兩側に附飾されてゐる「四葉文」金具即ち華文金具と其の毛彫とである。此等の華文金具は何れも上瓣には鳳凰を、下瓣には玄武を、左右の花瓣には夫れ／＼青龍白虎を陰刻してあるが、特に注目さるべきは、其の一つの鳳凰を彫むだ傍に蓮の葉を表はしてあり(挿圖七)、又他の一つの玄武を刻したものの上方にあたつて恰も「四葉文」と云はれてゐ

(172)

る華文に見るが如き先端の尖つた四つの大きな瓣を有する蓮の花が將に開かうとする様子に表出されてゐると云ふことであつて(挿圖八)、我々をして、此の種華文金具の全形が何んとなく蓮の花の大きく開いた狀に象つて出来たものの如く思はしめるものがあるからである。蓋し爾雅釋草に「荷芙渠、



七 圖 挿

漢代木棺飾金具(漢代古墳出土)朱鳥  
蓮の葉部分

其莖茄、其葉蓮、其木薺、其華兩荷、其實蓮、其根藕」と見え、更に説文卷一には詳細を述べ

菡萏也、从艸聿聲、萸菡萏扶渠華、未發爲菡萏、已發爲夫容、从艸闕聲、蓮扶渠之實也、从艸連聲、茄扶渠華、从艸加聲、荷扶渠葉、从艸何聲、薺扶渠本、从艸密聲、藕扶渠根、从艸水昌聲と記してゐるやうに、蓮華について

は、其の已に開いた時に用ふる稱呼や、將に開かんとする際に呼ぶ名稱などがあつたことに徴すると、漢代の支那人の間に蓮華が如何に尊重されてゐたか想像に餘あるものがあるので、當代の遺品に蓮華が色々に表はされてゐたものと推測しても何等支障無からうと思はれる。従つて上叙の如く、其

の一部に將に開かうとするところの蓮華即ち許慎の云ふ菡萏を刻し、又他の部分に蓮の葉即ち荷を表はしてある漢代木棺の華狀金具の全形を以つて、已に開ききつたところの蓮華即ち夫容を表徴したものであらうと認めることは、強ち無稽ではないであらう。



八 圖 挿

漢代木棺飾金具(漢代古墳出土)武玄  
蓮の花部分

果たして以上のやうに考へることが許されるならば漢代瓦璫に見ゆる「四葉文」は蓮華を表現したものと看做して、殆んど過誤無いと思はれる。而かして樂浪郡時代の城址發見にかかる瓦璫の如きは(挿圖一)、蓮華に菱を配したものと認めるのが穩當であらうか。

なほ淮南子本經訓に當時の建築に

蒼澤なものにあつたことを叙し、「櫨檐榱題、彫琢刻鏤、喬枝、菱阿、芙蓉、菱荷」とあるのは、漢代の榱題(頭)等に菱形文や蓮華文などが刻してあつたことを物語るものであり、或はまた張衡の西京賦や司馬相如の上林賦に見ゆる菱榱も榱に蓮華を書いたものと看することも出来得るであらう。凡て瓦璫

の文様と椗頭の瓦の意匠とに同じものがあることは、我が飛鳥奈良朝の寺院などの瓦瑠や椗頭の瓦に同じやうな蓮瓣のあることから知られ、又樂浪城址から「大晋元康」の文字ある瓦瑠と椗頭の瓦とが出土することからも察することが出来るので、前舉本經訓に見ゆるが如く椗頭に芙蓉即ち蓮華を刻したものがあつたとすれば、其れと同じ華文は漢代の瓦瑠にも施こされてゐる筈であつて、此の椗題の蓮華文の形狀も亦た此處に問題としゐる瓦瑠に見ゆるやうな「四葉文」(挿圖一)に相違なからうと私かに考へるのである。

云ふまでも無く、支那に蓮華文が盛行したのは六朝以後佛教と共に、その藝術が移入されてから後のことではあるが、前に掲げた樂浪晉野里出土の木棺金具の毛彫に徴し、又本經訓の記事を參酌し、更に所謂「四葉文」を華文と認め、それを上記の如く蓮華であらうと推測すると、支那に於いては佛教と關係なく、漢代から蓮華が裝飾として用ひられてゐたものと云はなくてはならない。いな先秦時代に於いても、支那人が蓮華を愛好してゐたことは、詩經鄧風の「山有扶蘇」に「隰有荷華」の語があり、同じく陳風「澤陂」に「彼澤之陂有蒲與荷」と見え、また楚辭離騷經に「集芙蓉以爲裳」とあり、同じく招魂に「臨曲池些、芙蓉始發、雜菱荷些」と記されてゐることから想像されるところであつて(此等の芙蓉が蓮華であることは文選に注した李善の言に據るまでも無い事であらう)、戰國式鏡鑑背面の「四葉文」が蓮華を表はしたものであることは既に了解された事柄に屬しよう。なほ

蓮華の花瓣を四瓣や五瓣、または三瓣などに現はしてゐるのは、六朝以後の支那本土の八瓣の蓮華文瓦瑠に倣つたもののうち、我が國の武藏國分寺や、朝鮮の高句麗時代の遺址竝に渤海國首都址の如き僻地發見の瓦瑠に見ゆる蓮華文様が四瓣や六瓣となつてゐると同じく表現が充分でなかつたためと観るべきであらう。

次に序を以つて叙したいことは、彼の後漢王延壽の「魯靈光殿賦」に「圓淵方井反植荷葉、發秀吐榮、菡萏披敷」と見え、同じく張衡の西京賦に「帶倒如於藻井、披紅葩之押獵」と記してゐることに關してである。同じやうなことは魏の何晏の「景福殿賦」や晋の左思の「魏都賦」などにもあるが、兎も角、魯の靈光殿は前漢の景帝の時に營まれたものであると記されてゐて當時の天井の格天井に荷葉、菡萏竝に茄の如き蓮華裝飾が施こされてゐたことが窺はれるのである。しかも前漢時代には未だ佛教藝術の影響を蒙つてゐなかつたものと思はれるので、靈光殿の天井の蓮華裝飾を雲崗石窟などの天井に見ゆるやうな蓮華文様と同じであると認めることは無理であつて、寧ろ前に叙した樂浪時代の木棺の金具毛彫りに茄と共に表はされてゐる將に開かうとする四瓣の蓮華や(挿圖八)、戰國式銅鏡の一つに見ゆる莖をもつ四瓣の花文(挿圖五)や、其の他の所謂「四葉文」と呼ばれてゐる華文即ち私が蓮華であらうと想像したところの文様と解することが穩當であらう。なほ此の間の消息を洩らしてゐるものは前掲漢の「四葉文」敷磚である(挿圖二)。何者、六朝以降の格天井に見ゆる蓮

(176)

華文様と同巧な意匠が、同じ時代の方形の敷壇にも存することは、渤海や新羅の宮址出土竝に支那發見にかゝる遺品の示すところであるから、漢代の敷壇に所謂四葉文を表はしたものであることは、同様な裝飾が漢代の格天井にも施こされてゐたであらうと云ふことを暗示してゐるからである。

上記の如く觀察すると所謂四葉文なる漢華文様の裝飾は漢代の建築の天井にも樓頭にも、瓦濬にも用ひられてゐたことになるのであるが、さて然らば、かくの如き意匠が建築に盛んに使はれたのは如何なる理由に據るものであらうか。固り、此種の文様が當時流行してゐたためでもあらうが、もう一つの理由は太平御覽卷百八十八に引用されてゐる後漢の應詔の風俗通に

殿堂象東井形、刻作荷菱、水物所以厭火也

と云つて、殿堂の格天井に荷や菱を表はすのは、水物であつて火を壓ふためとあるやうに、火災を防ぐと云ふ一種の magical な意味が附されたためでは無からうかと臆測される。前掲靈光殿賦に徴し、又宋書卷十八禮志に

殿屋之爲圓淵方井、兼備華者、以厭火祥也

と記してゐるのに據れば、風俗通に見ゆる荷は蓮の總稱として使はれてゐるのであつて、蓮の葉ではなく、寧ろ蓮の華を指したものであると認めて支障ないのである。

最後に附記したいことは、漢代の瓦濬の四瓣の蓮華文が高句麗時代の瓦濬中の四瓣の華文を表はし

たものなどに餘影を残してゐるのではあるまいかと云ふことであるが、此れに就いては疑を存して置くに止める。

## 註

(昭和十二年九月)

- (1) 駒井和愛「漢華手文瓦濬考」(東洋史會紀要第二冊)
- (2) 石田茂作氏「古瓦圖鑑」圖版一〇五を看られたし。
- (3) 伊東忠太博士「東洋建築史」頁一五三(東洋史講座)に據る。
- (4) 梅原未治氏「漢以前の古鏡の研究」に據る。
- (5) 同上圖版一〇三並に挿圖二一六等參照。
- (6) 原田淑人先生駒井和愛「支那古器圖政舟車馬具篇」頁三〇參照。
- (7) 野守健氏柳本龜次郎氏等「平安南道大同郡大同江面梧野里古墳調査報告」(朝鮮總督府昭和五年庚午古蹟調査報告第一冊)
- (8) 關野貞博士等「樂浪郡時代の遺蹟」圖版二一五
- (9) 伊東博士等の説に従つて、漢井・方井などを格天井と解して置く。なほ伊藤清造氏「支那の建築」頁六四六參照。
- (10) なほ常盤大定、關野貞兩博士共著「支那佛教史蹟詳解」二の頁七五に河南省龍門賓陽洞の天井と床とに相似た蓮華文が刻んであると記してゐることなども參考となるであらう。
- (11) 關野貞博士等「高句麗時代の遺蹟」圖版五一並に諸岡榮治氏「樂浪及び高句麗古瓦圖譜」圖版二八等を參照されたい。

(177)